

マッセ・市民セミナー
福祉を学ぶ府民講座①

「発達障がい児者の理解と支援について」
～児童から青年期を支える教育・療育・福祉の連携～

日時 平成23年6月15日（水）

場所 大阪府社会福祉会館5階ホール

基調講演

軽度発達障がいの子どもの理解と関わり方
～教育・療育・福祉の連携と家族・地域の役割を中心に～

田中康雄氏

(北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授)

田中です。今朝、北海道から来ましたが、大阪は北海道から日帰りできることが分かりました。大阪は尋常ではない暑さなので、早く帰りたくて仕方がないのです。大阪には夏休みなどに呼ばれることが多いのですが、毎年、すごく暑さを実感して帰るところです。今年は北海道も暑くなるのではないかと思うのですが、暑さが大変だということを今日は朝から感じました。

今日の話は1時間でということなので、あまり細かい話はできません。発達障がいというタイトルをいただいたのですが、医学的な話はしません。言っている人間自体が分かっていないので、皆さんにお話ししても分からないと思うからです。発達障がいのことは本にいっぱい書いてあるのですが、書いてあるものを読むと余計分からなくなるというのが、発達障がいの世界です。ですから、今日は細かい話はしませんが、そうは言っても「こういう診断はどう考えたらいいのか」というご質問はお受けしようかと思っています。

今日、僕のテーマは、お子さん自身への支援なのですが、小さい時期は親がどんなに大変かをお伝えしようかと思っています。その次に、実際に子どもたちが生きづらいわけですから、その点をお伝えできたらと思います。高校以降の就労に関しては、この後、実践されている野田さんがお話ししてくださるので、そちらにお任せしようと思っています。われわれも、発達障がいに関わる仕事を長くしていると、小さいときに会った子が就労の戸口に立つ、高校あたりでみんな青色吐息と言いましょうか、かなりへろへろになっていて、高校を辞める子も出てきます。そして、仕事に就こうとして、どうしたものかと一緒に困っているのが私の現状なので、この後、野田さんの実際の報告で教えていただければと思っています。



今日、ここに来るとお伝えしたところ、大阪にはすごく元気な方がたくさんいるのですが、「全国LD親の会」の代表から頼まれて、公開フォーラムの紹介のチラシを会場に置いていただくことにしました。ドーンセンターで開催するのですが、まだ若干どころではない数が空いているようで、皆さんに来ていただければうれしいということです。6月19日の10時15分から17時30分まで、1日というタイトなスケジュールになっていますが、竹田契一先生や品川裕香さんなど、就労の実情に關したお話が聞けるということです。厚生労働省の方も来られるようで、厚生労働省が行政的に現状をどう思っているのかというお話も聞けるということですので、そちらもご活用いただければと思います。

1. 軽度発達障がいの実情

支援というのは発達障がいを支援するのではなくて、ある特性を持って、「つらいな」「困ったな」と思っている人を支援するわけです。ですから、いくら発達障がいの勉強をして、発達障がいのことが分かったと思っても、本人の痛みやつらさ、日常というところには、もう一步踏み込まないと近寄れないのです。親のしんどさも十人十色です。そういうところにつながっていかなければ、支援はスタートしません。だから、僕は相手を知ることからはじめるべきだと思っています。

2. 基本的対応

支援者の方にお願したい基本的な対応は、僕も心掛けているところです。つつい忙しさにかまけると忘れてしまったり、おざなりになったりするので、いつも自分のためにも考えておこうと思っていることです。一つは「その子の良いところを探そう」ということです。せっかく相談に来てくれたときに、「すごい」「偉い」「やったな」と言いたいのです。長所を探して認めてほしいと思います。それは、親御さんの前で長所を見つける支援者になっていただきたいということです。

親御さんも病院の相談室に来ます。疲れています。「お母さん、やってられないよね」と言うと、「やってられません」と元気なお母さんは言ってくれます。元気ではないお母さんは泣きます。泣き言など言っても仕方ないという感じで黙ってしまいます。孤軍奮闘しています。だから「頑張ろう」な

どという、どうしようもない言い方をしても仕方ないのです。しかし、病院へ来てくれて「今日はすごいね、お母さん、片付けているよ」とかと言って、「うちでは絶対にしないのですよ。外ではいい顔をするのです」とお母さんが答えると、「外づらがいいというのは財産だよ」というように話をします。「内づらなんてどうでもいいのです。外づらが良かったら、かわいいと思えるではないですか。偉いと思う」という話をするのです。要は、長所を探して認めることです。

「ともかくできないのです。起きてこないのです。何回起こしても無理なのです。着替えをしないのです。朝からずっと1時間もバトルです」と言うお母さんと、この間お会いしました。「1時間もバトルするとお互いに疲れるよね。どうして?」「靴下を履いてくれないのです」と言うのです。「もうそろそろ履かせないと、小学校に行くときに大変だと思うのです」と、幼稚園の園児のお母さんがおっしゃいました。「大変かもしれませんが、くそ忙しい、朝のばたばたしているときに1時間もこの子に付き合うとお母さんがもたないから、履かせてしまえばいいではないの。履かせたら両足で3分だよ」と言うと、「いいんですか、私が両足履かせて」と言われたのです。「だって、ほかに履かせられる人がいないではないですか」「だって、それぐらいできなかつたら」「この子が40歳になったとしましょう。お母さんが65歳ぐらいですよ。この子が40歳になって『お母さん』と足を出したら、そのときはたたいてもいいです。しかし多分、この子が40歳のときには足を出さないとします。残念なことに、きっと15歳か16歳ぐらいで足を出さなくなってきました。どんなにお母さんが『履かせたい、見捨てないで』と思っても、先にこの子が見捨てるから。付き合えろとしたら、あと数年です。だから、だっこをして、仕方がないと靴下を履かせる思い出を作れるのは今ではないの」という話をしたのです。

仕方がないと思ったのでしょうか。「1週間、取りあえず履かせていたら、その日、楽に過ぎました」という話をされました。「そうだよ、1日楽に過ごせたら、お母さんも空いた時間にコーヒーが飲めるものね」という話をして、「少なくとも、それで叱ることがなくなったので、ストレスが一つ減りました。次のストレスは、いつまで履かせるかです」と言うので、「いつまでか分からないね。もし15歳でも履かせろと言ったら、お母さんのことが大好きな子だと言えるよ」という話をしました。そして「10歳前後で部屋か

ら出なくなったというときには『心の自立だね』と僕は言うから。それまでにはあと5年か10年かかるのではないかな」「長いですね」「人生はもっと長いよ。今、5歳か6歳だから、この子はあと60年あるよ」という話をしました。習得には時間をかけていただきたい、援助は続けてください、ばかにしないでください、結論は急がないで待っていてくださいということです。

もう一つ、時々、幼稚園の先生や小学校の先生に来ていただいたときやこちらから伺ったときにお話をするのは、見返りを期待しないでほしいということです。幼稚園の先生はものすごく大変なのです。恐らく、発達障がいの世界で一番大変なのはお母さんで、その次に今を生きている子どもたちで、その次に、専門職で一番大変なのは保育士さんです。だんだん年が上がってくると、大変だけれど、関わらなくて済むのです。北海道では、高校などは「来ない？退学よ」というような話で、それ以上の話はしません。また、大学などは来てくれませんので支援したくても相手がいない状況なのですが、保育所、幼稚園の先生はずっと目の前にいるので大変なのです。

僕も幼稚園や保育所によく行くのですが、体がもちません。翌日、足腰がいうことをきかないぐらい走り回らされます。体力がなければこの仕事は務まらないと思うのですが、ほとんど見返りはありません。ニコッとしたかと思うとかっとかまれたり、べたべたしたかと思うとつばを吐かれたりしますし、ポーっとしているときに後ろから跳び蹴りされますので、こんなに見返りのない仕事はないと思います。それをお母さんに言うと、「そうなのよ、うちと一緒にね」と言われて、「えへへ」と言うしかなくて、「すみませんね」と言われても、お母さんの手に菌形が付いていると、お母さんに言っても、どうか思ったりもするのです。ですから、唯一、保育士さんには「1年、2年たてば別れるから」とお願いするしかないのです。「親は一生。だから保育士さん、つらいけど、あと数か月だから、次は替えてもらおう」という話をするのです。替えてもらうともっと大変な子がいたりするのですが、見返りがありません。

大体、卒園式に大泣きするのは保育士さんで、大変苦労した園児はニコッと笑って、「じゃあ」といなくなってしまうのです。そのつれなさというと、天下一品です。「やだー、ここ卒園したくない」とかと言ってくれるかわいい子はめったになくて、突然いなくなるのです。

また、3年間を振り返って親御さんと労をねぎらいあえるかと思うと、親

御さんは目の前の小学校を見えていますから、もう過去は振り返りませんので、卒園式でも保育士さんへの見返りはないのです。ですから、見返りをお願いしたいのは、小学校の1年生の先生です。もしここに1年生の先生がおられたら、1年生の間に、彼ら、彼女らがいた保育所、幼稚園に一回足を向けて、担当だった保育士さんや園長先生に「いっぱい保育してくださいました」と言ってください。「あなたたちがやってくくださったので、1年生として、ともかく頑張っています。まだまだ問題は山積みなのですが、恐らく1年前はもっと大きな山だったと思います。それが小さくなった子に付き合っ、私はへろへろなのですが、恐らく先生はもっと大変だったと思います。よく耐えられました」と褒めてあげてください。

そして、小学校1年生の先生は、2年生の先生から褒められてください。過去に関わった先生たちがいかに大変だったかと、今関わっている人が労をねぎらうのが見返りです。当事者や親御さんからの労のねぎらいはありません。当事者は毎日大変なのです。お子さんは日々試練です。労をねぎらうような、見返りを渡す暇などないのです。親御さんも同じことです。ですから、見返りはぜひ、そんなふうにしていただければと思います。

僕は障がいを治すのではなくて、状況や関係性を修復するのが支援だと思っています。発達障がいというのは、発達がせき止められてしまう、差し障りがあって害があるという言葉で、あまりいい名称ではありません。これは日本語だけで、中国の方に聞くと、障害の「害」はこんな漢字は使わないそうなのです。害というのは悪いものという意味なので、害虫などとは使うけれど、人には使わない漢字だと、中国の方はおっしゃいました。「碍」という字を使うそうです。これは川の流れが石によってせき止められるという意味です。川は流りたいのです。それなのに石という異物があることによって止められてしまうのです。発達障がいがあっても、彼らは真っすぐに生きたいのです。しかし、無理解という石の下で止まるのです。彼らの発達は障がいされていない、障がいされているとするなら、生活が障がいされているのです。

僕は発達障がいというのはいい名称ではない、生活障がいだと思っています。生活は改善できるのです。その子の育ち方や発達の仕方に関して、「この子、まだ言葉が出ないのですが、いつから出ますかね」と言われても、「私は予言者ではない」というような話をするしかありません。「そんなこ

とが分かれば大変だ、水晶玉なんて私は持っていない」という話です。「この子が就学したらどうなりますかね。治ったときが楽しみです」という話しかできません。

しかし、少なくとも今の生活を少しでもいいようにすることがとても大事だということで、状況の関係性を直していきます。

子ども一人ひとりに事情があるのです。2階から飛び下りたくなるほどキレるお子さんには、ずっと入院もしていただいたし、彼に付き合っているいろいろ話も聞きました。最終的に分かったことは、お父さんによくたかかれていたということだけでした。それをお父さんに話しました。「この子はお父さんの期待に添いたい、お父さんに認めてもらいたい、だけど、お父さんに認めてもらえなくてとてもつらい。それで時々『こんな、お父さんに認めてもらえないおれは死んだ方がましだ』と思うのですって」とお父さんに話しました。するとお父さんは、「そうだったのですか」と言って、週末に彼と一緒に釣りに行ってくださいました。それから彼は少しずつ落ち着いてきます。

もちろん、お父さんは手が早いですからたたきますが、「この子はおれのことが好きなんだ。おれの期待に添いたいと思っているのだな」とお父さんが分かったときに、少しだけ変わりました。だから、「時々また釣りに連れていくのだ」という話をしてくださいました。私はこれを虐待とは呼びません。適切ではない関わりがあったというだけなのです。そして、お父さんには適切な関わりをしたいという気持ちがあるのです。だから、修復できるのです。そう言っても「何だよ」とパンと目の前でたたかれてしまうと、「すみません」と言って通報するしかありません。しかし、子ども一人ひとりの気持ちが分からないと、それは認められません。僕たちの力がどのくらいあるのか、何ができるかということです。親御さんは誰よりも理解しているはずなのに、うまくいかないといって落ち込んでおられるのです。

たまたま昨日、ご高齢のお母さんが、40歳を過ぎた発達障がいのお子さんの行く末を案じて来られました。今はきちんと施設等々でサポートを受けているのですが、もっと安定した生活をさせたい、でないと死んでも死にきれないとお母さんが来られて、年金も私財も死んだときの遺産も、すべて施設に寄付してもいいから、もっとこの子が人間として生きられる時間や状況を作ってあげたいという話をされました。高齢なのですが、パワフルな方

でした。

そのお母さんがずっと話をされていたのですが、そのお母さんでさえも、最後に「先生、私の育て方のせいでしょうか」と言われました。80年も生きてきて、もう40歳を過ぎたお子さんを前に、「育て方」と言われるのです。80年前の話を今ここでしてもという話ですが、ずっと80年間そう思い続けているのです。もちろん「そんなことないよ、お母さん」と話しますし、いろいろな障がいの会にも親の会にも入られているので分かっておられるのです。しかしそれでも、「もしかしたら、本当に私のせいかもしれない」と思い続けておられるのです。その親御さんを支え続けていく必要があります。

発達障がいという診断を医者なり福祉が行います。親御さんはショックを受けます。「違う」と否認したいです。しかし、やはりそうかと思うと、悲しみや怒りになります。原因を突き止めようとします。解決策を探そうとします。ついこの間も北海道で、「自閉症は治る」というセミナーが開かれたときに、1回では人が集まりすぎて、2回に分けて開催するほどだったそうです。いろいろな特別なことをやるそうです。私は参加しなかったのですが、うちの大学院生が「ちょっと行ってきます」といって参加してきたらしいのです。そして、「何だかよく分からなかったけど、金がかかるみたいです」という報告を受けて、「どのくらいかかるのだ」と聞くと、「最高で300万円と言っていました」という話でした。「そうか。簡単に言えば300万円で治るという話だったのだな」と言うと、「そうみたいです」という話をしていました。21世紀でもいまだにそういうセミナーがあるのです。

その話をしたところ、自閉症の親の会のお母さんに怒られました。「田中さんはそうおっしゃるが、話を聞いて少しでもいい話なら、300万円なんて車1台だ。私はやるよ。私が100万円出して、お父さんの実家から100万円もらって、私の実家から100万円借りたら300万円集まる。マックス300万円なのでしょう。そしたら何とかなるわ。けれども、うちの子はもう20歳過ぎているからもういいけど。田中さん、忘れちゃいけない、親は必死だよ。先生から見ると、これはうそだともうかもしれないけれども、一縷の真実があるかもしれない。もしかしたらということがあるかもしれない」とおっしゃったのです。

20万円もする浄水器が飛ぶように売れた時期がありました。その水を飲んだら言葉が出たという話が広まると、その浄水器がばんばん売れたらしいの



です。私が「それもおかしいな」と言うと、そのお母さんにまた叱られて、「浄水器の水は飲めるんだから、いい水でしょ？ それで言葉が出たらいいのではないの。出なかったら出なかったで浄水器として使えるではないか」と言われて、「そうだな」と思ったのです。そのぐらい解決策を探す必死さを私は感じます。

残念ながら、特性は変わらないのです。しかし、同時にその特性を残念だと思わないで生きてほしいと、私たちは思うのです。それは私の勝手な希望ですから、そうお伝えしても、当然、親御さんは落ち込みます。「どうして産んでしまったのだろう」とおっしゃるお母さんが山ほどおいでです。もう道義的な話ではないのです。情緒的な部分で、「でもね、お母さんも一生懸命やっているし、この子も一生懸命生きているし、何よりもお母さんとの関係が悪くないし」という話をするのですが、「でもね」とおっしゃいます。「神様に選ばれたお子さんです」という絵本を糧に頑張っている親御さんもおいでで、偉いと思う半面、同じ話をしたときに「親の会などに行くと、おれもよくそういうことを聞くんた。でもね、田中さんの前だから言うけど、おれは神様は信じねえけど、もし、本当に選んだのなら、その神様を恨むよ」というお父さんがおいででした。それも正直だと思います。

そういう親御さんは、「やはり治ってほしいと思う」と言われます。自分が先に死ぬのだという思いもあります。その80歳のお母さんも、ものすごく熱い手紙を書いてこられたのですが、その根っこにあるのは、「私は先に死ぬのです」という気持ちです。もしかすると死なないかもしれないと思うぐらいお元気なのですが、「でも、順番から言うとそうですよね。ですから私が生きている間に」という話を本当によくされるのです。

3. 親は早い時期に気付いている

最近、早期に発見しましょうという話が随分とあちらこちらであります。先ほどの1歳半健診もそうです。5歳児健診もそうです。早く見つけて早く治してあげようというのは、私は悪いことではないと思うのです。しかし、この子に診断がつくかどうかを発見するのが重要なのではなく、必要なのは、この子の今の力だと少し配慮が必要だよねという気付きなのです。それに気付いていただくと、幼稚園の先生に「こんなふうに一声掛けてください」とか、トイレに行くときにも「ここに立つのだよ」とビニールテープ

を張っておいてくれたらおしっこがきちんとできますとか、「君専用のトイレ」と言えばトイレができると思いますよとか、お昼寝が嫌ならここで遊んでねという配慮をお願いできるのです。

「重症ですか？」と言われても、それは分かりません。それはこちらに置いておいてという話なのです。今は早期の診断支援という話になりそうなので、私はそれはやめてほしいと、いつも思っているのです。少なくとも親御さんは、3歳前にどこかが変だと自覚しているようです。育てていて、何かが違う、どうも違うと、ずっと思っているのです。でも、その段階ですぐに病院に行っても、恐らく親の直感が診断の中で浮上してくるほど、症状としての兆候はないはずなのです。

「お医者さんに、お母さんの考え過ぎだよと言われました」と、実際にお母さんに言われたこともあります。「『お母さん、発達障がいにしたいの?』と私は言われたのですが、5歳になると、お医者さんは『ごめん』と言いました」と言われたこともあります。ですから、親のまなごしは正確なのですが、医療機関や福祉に相談に行くと診断がつくまでには、大変時間がかかるようです。

そう考えると、親は発達障がいに困っているのではなくて、やはり自分の対応に子どもがうまく乗っていないことに悩んでいるのです。そして、この後、どうやって生きていけるかということを心配しているのです。

お父さんやお母さんやおじいちゃんやおばあちゃん、兄弟の温度差などもあります。これは地域によって違うと思います。北海道はかなりお母さんの一人親家庭が多いので、お父さんとの関係が出てこないこともあります。時々お父さんが登場してくると、大体、お父さんの考えは「考え過ぎだ」とか、「おれが何とかしてやる」というものです。ほかに、兄弟同士の葛藤でうまくいかなかったり、時々はおじいちゃんやおばあちゃんが入ってきて、どちらの家系似などという話が出てきたりと、つらい話がまだにあります。その中で、基本的に小さいときはお母さんの孤軍奮闘だと思います。

兄弟の思いについても、最近は随分調査されています。兄弟の心情というのでしょうか、孤独感だったり、僕が生まれなければよかったのかとか、親の愛情をめぐる張り合いをしてみたり、またある時期になってくると少し親に反発するという形で不満が出たりします。また、その一方で、とても忍耐強く、我慢強く、感謝の気持ちを忘れずに、教育や福祉の現場の方に進も



うとしている方々も少なくないという印象を持ちます。立派だと思うのですが、そういう兄弟もいます。

4. 本人への説明について

本人にどう説明するかということでは、吉田友子さんが最近、いい本を書かれました。本人に診断を告知したり説明するのは、肯定的に自分を理解してもらったためだと、きちんと書きました。診断結果などを伝えるのが医者の仕事というのではなく、君は悪くないということを伝えたいのです。君が持っている特性をもっと生かすと、もっと光が当たると肯定的にとらえるために、きちんと知っておこうということを彼女は本に書いたのです。

私もそうだと思います。ただ、伝えるタイミングが重要だと思います。私は大体、中学生以降、高校生、大学生でないと、本人に名称は伝えません。ただ、特性は伝えます「君はうっかり屋さんだね」「君はマイペースだね」「君はわが道を行く人だね」という話をしたりします。また、「少しだけでも立ち止まって聞いてくれたらうれしいね」という話もします。それでも伝えなければいけないときは、安定しているとき、規律が守れるとき、理解できるときを選びます。そして、何よりも僕が伝える一つの指標にしているのは、うれしいとき、幸せなときに伝えたいということです。

例えば、学校でいじめられたから、そろそろこの子にもそういう特性があることを教えましょうというのは、バッドタイミングなのです。だから、いい先生と出会いました、いい高校に入りました、大学の入学が決まりました。おめでとう、これからは君も自分のことをもう一歩知ろうねという、めでたいときに伝えたいというのが、この診断名だと思います。親御さんには覚悟が必要です。伝えたいと実感していて、二人親がいる場合は意見が一致していることが絶対条件です。勧めるときは、これを読んでおいていただければと思います。親御さんにいろいろな気持ちがあるので、安易に「受診してみたら」「相談に行ってみたら」というのは、なかなか勧めにくいということです。

5. 連携する

その際に必要なことは、関係者同士が連絡・連携を取る、ネットワークを組むことです。自分一人の力では及ばないので人の力が必要なのだというこ

とで、大変なことが誰かに見られてしまうということではないのです。自分の力プラスアルファではにっちもさっちもいかないところを、あの人やこの人につなげば3～4倍の力が出ます。自分一人では解決できないということ、自分の力が及ばないということがポイントです。

同時に、これは誰のための支援かということになると、ついつい支援者は、どうも支援している中で自己陶醉してしまうというか、自己満足してしまいがちですが、この子のために、この親のためにということが、子どもと親が求めていることなのです。つまり、ニーズに添った支援ということなのです。最もニーズに添っていないのは、親の希望と関係ないところで障がいを伝えてしまうとか、親に向かって「障がい児を知りなさい」という指示を出すことで、それは大きなお世話なのです。

自分が楽になりたい支援ではなく、子どもがもっとほっとできるための支援、親がもっと肩の力を抜いていい支援ということを考えていく必要があります。そのためには、専門職が役割分担していくことが大切です。気を付けなければならないのは、お互いが責め合わないことです。一生懸命に孤軍奮闘していると、周りの無理解に腹が立ちます。もっと学校が頑張ればいいのにとか、保育士さんが頑張してほしいなどと思います。しかし、実際に現場に行くと、ものすごく頑張っている人がたくさんいます。私も学校に行って初めて「ああ、先生は大変なのだ」ということがよく分かりました。「この子は大変なのだけど、この子も大変なのです。37人、本当に一人ひとり、みんな大変なんです」と言われると、「先生、この子が一番大変なんだから」と言えないと思うぐらい、日々大変なのです。

先ほど言ったように、保育士さんなども、行ってみると本当に足腰が立たないほど振り回されていて大変だと思います。最近は高校支援から大学支援もしているのですが、そうは言っても確かに大変だということも分からなくもありません。みんな一生懸命だということを考えると、誰も責めてはいけないということが分かります。これもポイントです。親はもう少しやってほしいという気持ちがあっても、それを言ったおかげで誰が不幸になるかと考えていただきたいのです。私と学校がけんかをして誰が幸せになるだろうかと考えると、この子ももっと不幸になるのです。だから、お母さんと学校が少しトラブったときには間に入って、「お母さんも頑張っているよね」「先生も頑張っているんだ」と言うようにして、お互いがお互いを理解できるよう



なところまで何とかサポートして、穴を埋めて去っていくのが支援者の仕事なのです。誤解を解いて、誰も悪くないのだということをお伝えしていくのです。

今、発達障がいへの支援は、かなり大きくクローズアップされてきました。現場の人間としては、責任を果たさなければならないと思います。しかし同時に、発達障がいを理解するのではなく、その子を理解するためには、「どういうつもりなんだろう」と、その子の心を想像するしかないのです。

ついこの間、お母さんとずっと話をしていたら、お母さんが急に「話をしていたらびんときたのですが、私はアスペルガーの子を育てているのではなくて、アスペルガーと診断はされているけども、この子の親なんだよね」と話をされました。「だから私はこの子を育てればいいので、発達障がいの親になる必要はないんだわ」と、お母さんは言われました。私は本当にそのとおりだと思うのです。

発達障がいが進んでいくと、みんなが発達障がいのプロになるのです。本もたくさん読まれていますし、発達障がいのことをあまり知らない人はいなくなってきました。しかし、この子の気持ちまで分かるかということ、まだまだ未熟なのです。そのずれを私たちは想像で埋めなければなりません。支援とは、育ちを見続けることです。よく育ったねと、一緒に喜びたいのです。

ついこの間も、小学校時代に学校に行けば大の字で寝ていた子がいて、先生と一緒にため息をつきながら、「どうしたらいいかな」と話をし、お母さんが外来に来ると泣いて「困ったね」と話をし、子どもも「うまくいかないんだ。おれなんか死んだ方がいいんだ」とかと言っていた子と、何年も何年も付き合っていました。ついこの間「高校に受かりました」というメールが来ました。紆余曲折はあるけれども、みんな、立派にたくましく育つのです。

あるいは、仕事をクビになって、トライアル雇用で駄目になって、落ち込んで「もう雇ってくれるところはどこにもないんだ」と言っていた子が、落ちても落ちても選んでいって、今、ようやく仕事について、水を得た魚になって頑張っています。そう思うと、幻想は捨てた方がいいでしょう。しかし、希望は持てるのです。今が大変だということは長く続かないと思った方がいいです。逆に、今がいいと思っても長く続かないと思った方がいいです。うっかりしているといろいろなことがやってきて、家庭裁判所に呼ばれ

たり、いろいろなことがあります。

しかし、私は失敗とは成功のためにあると思うので、つまりいたときには「早めにつまづいてよかったね」と言います。この間、弁護士さんをお願いするような事件が起きたときにも「この程度で終わってよかったよね」と話をし、よく本人に伝えて、二度とこうならないように気を付けるということをし、ようやく具体的に本人と相談できるようになりました。やかに触つてみないと熱いのが分からないのと同じように、時には痛い目も必要です。しかし、作為的にはできないもので、やらなければやらずに済むようなことをもしやってしまったとすれば、そこからまたつないでいけばいいと思います。

支援者の心構えは、悩み、心配し、耐えることです。私はあきらめないことを取りあえず入れておきました。親が一番バーンアウトしがちです。大変です。子どもも「死んだ方がましだ」と言います。私は子ども本人ではありませんし、親のように365日一緒ではありません。気楽だから、あきらめないのです。「何とかなる」と思えるのです。しかし、この子とずっと付き合ったら、そう思えないかもしれないということも、正直に言います。「樂觀的かもしれないが、それは私に余裕があるからだよ。365日、この子の今の散らかし具合と一緒にいたら、私も怒鳴るし、たたくし、『いいかげんにしろ』とおもちゃを捨てると私は思います。しかし、仕事だから思わないだけなんだ」と言います。だからこそあきらめないでいると、何かいいことがあります。

6. 「生きづらさ」の改善を一緒に考えていく

発達障がいというのは、過去から未来永劫に至るまでを決定付けた、普遍的な構造ではないというのが私の考えです。一人ひとりが持っているさまざまな条件や特性のうち、今の社会生活を送る上で「生きづらさ」が強く作られる「たまたまの」特性なのです。時代が変われば、社会の理解が変われば、もしかしたら大きく変わるかもしれません。実際にすごい成功を収めた大人の方もたくさんいらっしゃることは、皆さんご存じだと思います。ただ、人生でたくさん成功を収めることはただの結果ですから、それを目的にしてはいけないと、僕は思っているのです。エジソンがどうだとか、ダウウィンがどうだとか、偉い人もいるものだと思うのですが、うちの子はうちの子として粛々と、正しく一日一日楽しく生きていけばいいと思うので、高



いものを目的にする必要は全くないと思っています。

ただ、少なくともたまたまの生きづらさは、修復できることだと思います。だから、障がいの消滅や消失を目指すのではなく、彼らが抱えている「生きづらさ」が改善できることを一緒に考え続けていくということです。この部分には回答がないのです。考え続けてもいい案が浮かばず、お母さんと一緒に「困ったね」と言って思案し、1週間考えてみるよと言って、一緒に考えてみようと思えることもあるし、いい案がないまま止まってしまうこともあります。お子さんが勝手にいろいろ案を出してくれることもあります。それが実は巢立ちということで、誰も回答を持っていないのです。しかし、彼らは着実に前に前に立派に育っていくということだけはきちんとと言えるということが、今まで仕事をしてきて分かりました

障がいの部分については、よく分からなくなってきました。お医者さんがいろいろつける診断というのは、恣意的だとも言え、つけようと思えばいくらでも名前は付けられるという状況になりました。ですから、あまり名称にこだわらず、この子のつまずきやすさ、この子の長所というものを身近な人が認めていくことと、支えていくことが大事ではないかと思います。以上です。どうもありがとうございました。

実践報告

発達障がいのある子どもへの支援について ～発達障がい・不登校児童学習支援をはじめとした相談等の実際について～

野田 満由美氏

(NPO法人み・らいず 堺市ユースサポートセンター 相談員)

1. み・らいずの歩み

はじめまして。NPO法人み・らいずの野田満由美と申します。本日は有名な田中先生の後に実践報告の場をいただき、とてもありがたいと思う一方、NPOでのマイナーな事業のお話になるので、皆さんの前で恐縮な思いなのですが、少しでも日々の活動の参考にしていただければと思っております。

NPO法人み・らいずとは、大阪市住之江区を拠点にスタートしたNPOです。最初は障がいの方の余暇支援を支えていこうと、私たちが大学のころに始めたボランティアサークルがきっかけです。特に福祉を専攻しているメンバーが集まったわけでもなく、ガイドヘルパーという制度を使って活動していたメンバーが集まり、NPO法人を取得することになりました。

最初は主にヘルパーの派遣などをしていたのですが、いろいろな活動が増えてきて、現在はヘルパーの派遣活動などは株式会社を作り、そちらの方で行っております。今日は発達障がいのある子どもたちの支援についてお話しさせていただくので、み・らいずの中でも発達障がい不登校支援事業の活動を報告させていただこうと思います。

2. 発達障がい不登校支援事業

発達障がい不登校支援事業の中でも、大きく四つの事業があります。一つは、大阪市からの委託事業である不登校の通所支援事業があります。もう一つは、堺市の子ども・若者総合相談センター事業というものがあります。また、自主事業としてランメイトという学習支援事業があります。さらに、この5月から就労移行支援事業も始まりましたので、今日はこの四つをご紹介します。

まず、不登校支援事業ですが、大阪市には子ども青少年局の管轄の子ども総合相談センターというものがあります。これまで大阪市には、児童相談所、教育センターの教育相談、ホットスペース事業という三つの教育相談場所があったのですが、それを一つにまとめていこうという動きがありまして、子ども総合相談センターというものに統合されました。これまで適応指導教室などもあって、それも通所事業として3か所にまとめられたのですが、その他、地域で通うサテライトという子どもたちの居場所が15か所大阪市内にあります。その15か所のうちの4か所をみ・らいずが受託して運営しているところです。

体制としては、コーディネーター1名、メンタルフレンド2名で、1か所につき3名で運営しています。活動の日時は、各居場所によって開催の曜日が違うのですが、どの居場所も、月曜日から土曜日のうち週4日やっています。午前11時から午後3時半までの間、子どもたちが通ってきています。

子どもたちは大阪市在住で、今、学校に通いにくくなっている小中学生で、年度初めの時期は少ないのですが、年度末の3月ごろになると、10人近くの子どもたちが1か所の居場所にいるようになってきます。活動内容としては、学校の授業のように時間割があるわけではないのですが、遊びを通して少人数での集団活動を行っています。よくやっているのはUNOや大富豪などのゲームを一緒にしながらコミュニケーションを取ることです。サテライトへの通所は、所属学校の出席認定という形で、校長先生のご判断になります。学校は欠席にはなっているのですが、サテライトに通っているということで認定されています。

3. 堺市ユースサポートセンターの活動

堺市では、子ども・若者総合相談センターとひきこもり支援センターの児童期部分を合わせ持った堺市ユースサポートセンターというものが1月4日から始まりました。私は今、そちらの相談員を務めています。こちらは39歳までの不登校、ひきこもり、非行、ニートの相談を受けるワンストップの総合相談となっています。私も、このワンストップというのを、言葉では理解できても、自分の体験としてどうとらえていいのか難しい言葉だと思っているのですが、総合相談に寄せられる相談はいろいろです。「どこに何を相談したらいいのか分からなかったけれども、まずユースサポートに電話した

ら、どこに電話したらいいか教えてくれるか」という問い合わせ、「発達検査を昔、受けて説明されたけれど意味が分からなかったし、日常生活にどう生かしているのか分からないから、どうしたらいいか教えてほしい」とか、本人さんからの電話で、「何を相談していいのか分からないから相談機関には行きたくない」とか、「高校などを中退してしまっるところがない」「用事がなくて家にいる」などです。親御さんの方からは、「子どもと何年も話ができていません、姿はときどき見るのだけれども、この夏は暑かったから、多分、数十キロやせていたのではないか」など、命の危険を感じる相談もあります。

先ほど田中先生もおっしゃっていたのですが、高校生年齢になると義務教育ではないので、学校に来られてないとなると、先生の方もそれをどう取り扱っていいのか、すごく困られるところで、中退するときに「このまま退学させてしまっただろうか」という相談もあります。私たちの方では、高校生年齢の相談機関、支援機関がなかなかないので、そこを担う役割を感じています。

ひきこもりの相談などでも、「中学時代から不登校で、そのままずっと家にいるのです。相談機関から見守りましょう、待ちましょうと言われて、もう30年たちました」とか、すごく胸が苦しくなるようなご相談もあります。私たちも、気軽にはないのですが、相談の場面で「待ちましょう」「見守りましょう」という言葉を使ってしまうことがやはりあるので、その言葉を安易に使ってはいけないということを、ユースサポートセンターの相談員になって、あらためて感じています。

発達障がいの診断を幼少期に受けただけでも、よくわからなかったという形で、そのまま放置されている親御さんもおられて、悪い意味ではないのですが、何をしたいのか、具体的なアドバイスがなかったということで、そのまま40歳になられているというケースもあります。お母さんからも、お母さんと言われても、もうおばあちゃんになっていらっしやるのですが、「あれは何だったんでしょう」とご相談に来られることがあって、その何十年ものブランクをどう埋めていけばいいのかを、関係機関とも検討しているところです。

不登校支援の中では、中学校までは相談機関もたくさんあるのですが、高校生や大学生になると相談する機関も少なくなりますし、支援していただ



る機関も本当に少ないのです。現在、ユースサポートセンターでは、本来はワンストップの総合相談なのですが、何か支援する機関として機能も持たないといけないと思い、少人数のグループ活動を5月から始めています。他者とコミュニケーションを取るようなレクリエーションの時間と、就労準備をしていこうという時間と2種類設けています。15～25歳までの方が5名ぐらい通われてきて、一緒にゲームをしたりお話をしたりしています。

その中でも発達障がい診断をお持ちの方もいらっしゃいます。保健センターのグループワークに行くときちょっと合わないとか、医療機関のデイケアに行っても何か合わない、就労支援のB型に行っても合わないということで、どこの支援機関に行っても、自分に合うサービスが得られないということで、どこにも行けないことがあります。ユースサポートセンターがそこを担うべきなのかどうなのかよく分からないままのスタートなのですが、目の前に困っておられる方がいらっしゃるの、堺市とも話し合いをしながらプログラムを進めていっています。

また、ユースサポートセンターは、子ども・若者地域協議会というものを持ち上げないといけないのですが、堺市役所の担当の方と一緒に、どんな協議会がいいのか、どんな座長にするのか、どんなメンバー構成でいくのか等、今、週1回の会議を持ちながら準備を進めているところです。

子ども・若者というテーマはすごく広いので、どんなところと連携していけばいいのかが広すぎて絞りきれないのですが、形だけの協議会を作るのではなくて、本当に現場に活かせるような協議会を作っていきたいと堺市の担当の方も考えてくださっているの、この10月には協議会の立ち上げができそうな感じです。ホームページでも情報をアップしていく予定なので、また見ていただければと思います。

4. 自主事業ランメイト

次に、み・らいずの数少ない自主事業のランメイトについてお話しします。これはよく「ラーメンですか」となど名前を間違えられるのですが、ラーメンが学ぶ、メイトは仲間ということで、み・らいずが作った言葉です。発達障がい・不登校・ひきこもり等で集団学習が困難な方に、現在、学習支援を行っており、今は50名ほどの子どもさんにご利用いただいています。お配りさせていただいたパンフレットがランメイトの案内です。

これは自主事業なのですが、み・らいずが立ち上がった2001年ぐらいからやっているものです。最初は1年を通して1～2名の利用で、全くはやらない事業で、「もういいのではないか」と何度もスタッフからは言われ続けたのですが、やはり必要だということで、細々と続けてきてよかったと思っている事業です。

時代の流れが激しかったと思うこの10年で、最初のころは自立支援法がまだなくて、措置の時代だったので、療育手帳のB2をお持ちの方はヘルパーが利用できなかったのも、ランメイトを使う方もいらっしゃいました。ランメイトと言っても、机の上でお勉強を教えるだけではなくて、社会勉強という名の下に、一緒に出掛けたりなどの支援をしていました。そのころ、手帳を持っていないか、やはり支援が必要ではないかと感じる子どもと出会うことが多くあって、いい言葉ではないと思うのですが、手帳のない子どもたちにも支援を届けようということで、事業をやってきました。

そのうちに、支援費制度や自立支援法ができてきて、障がいを持つ児童にもサービスがしやすくなったというか、届けやすくなると、ではランメイトは何を支援していくのかということになるのですが、そのころに発達障がい者支援法ができて、そのころから、やはり発達障がいの方のニーズがランメイトに寄せられるようになりました。

繰り返り上がり、繰り返り下がるの計算ができないとか、漢字が覚えられないとか、連絡帳が書けない、板書ができない、テストの問題の意味が分からないからテストが解けないなど。お母さんにすれば、横について家で教えたらできるのに、何で学校のテストは点が取れないのというので、一緒に探っていくと、テストの問題の意味が分かっていないので白紙で返ってくるということが分かったりもしました。あと、鬼ごっこのルールが分からないということもあります。小学校のルールはすごく変化が早くて、鬼ごっこをしていたはずなのに、急に「色鬼」になっていたり、「高鬼」になっていたり、いろいろなルールが急に増えてくるので、そのルールに子どもがついていけなくて遊べないというニーズがあるのです。また、縄跳びなどで、手を動かしながらジャンプするなんてとても難しくてできないとか、あるいは、雨の日の遊びです。外では元気に遊べるのだけれど、雨の日にはトランプやUNOになったら遊べないから、雨の日は学校に行けないとか、勉強は教科書を見たら分かるのだけれども、ウインドウショッピングの仕方が分からないから買い



物の仕方を教えてくださいとか、いろいろなお声がラーンメイトに届いてきました。ですから、子どもたちの状況や発達の段階に合わせて、特性に合わせて個別のプログラムを盛り込んできました。

10年やってくる中で、ある程度、こういうニーズが寄せられるということで、まとめてみました。「そもそも何のために勉強するかが分からない」「義務教育って何なの」などとぶつけてくる子どももいたり、人と会いたくないとか、何もする気がしないということで、ラーンメイトを利用される方もいらっしゃいます。ですから、勉強を教えるというよりも、メンタルサポートとして、一緒にゲームをしたり、好きなことに付き合ったりという90分を過ごしています。

また、勉強の仕方が分からないとか、一人で宿題ができないとかというときには、そもそも勉強の習慣がつきにくいので、一緒に90分間、どう勉強を組み立てるかというお手伝いをしたりしています。文章問題が苦手なので、先ほどのようにテストの問題の意味が分からないとか、読解力がつかないという場合、国語の問題で「このとき作者はどう思っていたでしょう」という問題があると、「僕は作者でないから分からないよ」と言われて、「さあ、どう説明しようかな」と、講師も苦勞しています。

また、英単語が覚えづらい子どもさんもいます。やはり記号の理解などは難しく、英単語に意味を見いだせない子などもいるのです。そういう子に繰り返し練習をさせると、余計に嫌がり、逆効果だということもあるので、もう少し楽しい覚え方はないものかと、講師の方が工夫してやっています。

また、学校のお勉強というよりも、社会性を身に付けるということで、ゲームのルールが分かりづらい、あいさつができない、子ども同士で遊べないという子どもたちに、ソーシャルスキルトレーニングの要素を入れて授業を組んだりしています。また、ラーンメイトを10年やっているうちに、最初子どもだった方がもう大学生になってきて、「アルバイトに行きたいのだが、面接が通らない」というニーズが出てきたので、「練習しようか」ということで、履歴書の書き方や面接の受け方というメニューが加わっています。

大体1回90分の授業で、月に4回という形でさせていただいているのですが、講師は現役の大学生がやっています。また、学年や年齢に関係なく授業をしていくので、個別のプログラムシートを学生が作成しています。長期目標は、親御さんの思いも聞きながら、ゆくゆくはこうなれたらいいというこ

とで作らせていただいています。現状、課題のところは、今はこういうミスが多い、こういうことはできているが、こちらはできていないということを書いています。さらに、実際はもっと細かく目標を決めていきます。例えば数学のプラスマイナスのミスが多いので、プラスマイナスの間違いを減らすために、6月中にどうするかを考えていったりなどです。

目標値が、例えば課題の9割を正確に解けるようにしようというものだったとすると、講師はどうするかというと、マス目のノートを利用して、まず、桁ずれをさせない。次に、プラスマイナスの記号の見落としを減らすために、机などの前に自分のミスを減らすための注意書きのようなものを置きながら勉強したりしています。

文章題が苦手な子なら、ヒントとなるキーワードで『『合わせて』というのがきたらプラスだよ』『『引いて』ときたら引くんだよ』と、言葉と式を合わせるようなヒントカードを作って、自分でそれを意識して解くようにしてもらったりしています。

文章問題などでは、国語のテストなどで先に問いを読んでもらって、そこから文章を読むようにしてもらおうと、「何を聞かれるのかな？」と先に心の準備をして問いを読めるようになるので、そういう工夫をしています。学期に大体1回ずつプログラムシートを立て替えていき、どうだったのか、どこを直せばいいのかを講師と考えています。そして、この計画を基に90分間の授業が組まれます。

このように、み・らいずの中ではラーンメイトもあったりサテライト事業もあったり、堺市のユースがあたりします。ですから、堺市のユースに来てラーンメイトを使っている方とか、いろいろな事業を利用させていただいている方がいらっしゃるのですが、最近、私たちがはっと気付かされる出来事がありました。私は人事異動があって堺市のユースに1月からいるのですが、その前はラーンメイトの担当者だったのです。そうすると、利用されている方が、ラーンメイトの担当の野田さんと、堺市ユースサポートにいらっしゃる野田さんは別人だというわけです。私はよく知っているから利用しやすいのではないかと思って、気軽に「何とかちゃん、今日はこっちに来たんやね」というような感じで声を掛けるのですが、彼女はうつぶせで、いつもは「野田さーん」みたいに來るのが、全然知らない顔をします。どうしたのかと思っていたら、違うときに「ラーンメイトで会う先生は分かるけど、



駅で待ち合わせをする先生は私は分からない」と言ったのです。「ああ、そういうことだったのか、よく口で説明してくれた」と、スタッフみんなが、私たちが気軽に声を掛けていたのが大間違いだったことが分かりました。スタッフの一人は、「彼女にはすごく日本の人口が多かったんやな」と言っていました。あらためて丁寧に関わっていくことが必要だと思い知らされたわけで、10年たって初めて気付くことがまだまだあります。

いろいろ言葉で説明してくれる子もいるのですが、説明が上手な方ばかりではないので、私たちが気を付けていることは、子どもたちは言葉にはできなくとも、私たちが言語化して返すということを意識してやっています。

み・らいずでは、大学生が直接子どもと関わるのですが、その子どもによって特性も違うので、手作り教材を毎週、毎週作りながら頑張ってやってくれています。学生の講師は、将来、教員を目指す者や児童福祉関係の職に就きたい者などが多いのですが、実際に学生のうちに、現場でこういうアセスメントや支援計画を作るとか、プログラムシートを作りながら教材まで作るという経験をして学校の先生になってもらえば、私たちもすごく心強いと思っています。スタッフは、学生たちには厳しく、「頑張って今のうちに勉強しなさい」と指導しています。

ランメイトの活動では、自主事業ということもあって、月謝が高いではないかという意見がよく寄せられるのですが、どうしても自主事業ということで、月謝を頂かないとやっていけない部分があるのです。私たちとしても生活困難なご家庭にランメイトのメニューを届けたいと思っても、なかなかお届けすることができなくて、2年前のアニティフォーラムでランメイトの活動などを紹介する機会を与えていただいたのですが、そのときにも厚労省の専門官の方から「何とかランメイトを広げる工夫はできないのか」とか、いろいろ言っていたのですが、ずっとそれが頭に残りつつも、良い案も浮かばず、今までできていたのです。

それが去年、大阪府の岸和田の子ども家庭センターから、生活保護家庭に学習支援を提供したいという事業ができたということで、「み・らいずさん、一緒にやりませんか」とご提案いただき、これまでもすごく手をつなぎたくても手をつなげなかったご家庭に学習支援ができるようになって、本当にうれしかったです。先週、子どもたちとの顔合わせも済ませて、本日より学習支援がスタートするというので、今日の午後6時ぐらいから、子ども

たち4人が通ってきて勉強を一緒に進めていきます。

企画してくださった担当の方やご協力いただいている学校の先生方も「何の事業が始まるのか」とすごく不安に思っていたらと思うのですが、ご協力いただいてスタートすることができました。この事業をどんどん広めていきたいと担当の方もおっしゃっていたので、どんどん広がっていけば良いと思っています。

5. 就労支援事業

平成20年度、21年度と厚生労働省の社会福祉推進事業として、早期就労体験というものを実施しました。対象となったのは中学生、高校生年齢の青少年で、不登校の子どもや発達障がいの子どもに参加していただきました。内容としては、み・らいずは大学生が活動の主体となっているので、大学生にビジネスマナーや障がいの理解などをしてもらって研修をして、ジョブコーチの養成をしました。事前トレーニングでは、本人たちに、あいさつ、実習で気を付けること、上着の脱ぎ方、靴の脱ぎ方など、非常に細かいことですが、練習をしました。それでトレーニングを終えて実習に参加するということをやっています。

2年間やったのですが、1年目のときは、実習先に型を抜いて検品するという仕事がありました。細かいところが合っているかどうか見なければいけないのですが、学生のジョブコーチが「合っているのか？ 合っていないのか？」と言いながら1個1個見ていたのが、実習生の彼の方が5本指を出してぱっとつかんで、ばさっと見て「はい、はい」と仕事を進めるのです。「本当に見ているの」とジョブコーチが突っ込むのですが、「僕には見えません」と、ばさばさっと仕事をこなしていて、実習先の方から「すごい、彼は働けるのではないか」というお褒めの言葉をいただいたりしました。

あと、ガラスの加工会社にも行かせていただきました。ガラスを機械で切るので、ガラスが割れるのではないかと恐る恐るやっていると、逆にその方が危ないらしくて、思い切りスパンといかななければいけないという仕事なのですが、学生の方が怖がって、実習生の方がスパンスパンとこなしたのです。それで、学生に「もっとちゃんとやりなよ」みたいな指摘をして、学生がそろそろやっていたら「それ切れてないから」と子どもの方から指摘があったそうです。「何で分かるの」と尋ねたら「音が違う」と言うのです。



音でガラスが切れているか切れていないか分かるのです。実際に実習先の職人の方も音で判断しているということで、彼の特性はその職に生かせるのではないかという、すごい期待を抱きました。

1年目も2年目も行かせていただいた焼肉屋もあります。具体的にどういった実習をさせていただいたかという、コミュニケーションが苦手なので、接客はハードルが高く、店舗の開店準備をさせていただきました。これまで自分ルールで過ごしていて、行きたいときに行くみたいなことをしていたのが、遅刻しなくなりました。自分が行かないことで迷惑が掛かる、店がオープンできないということで遅刻しなくなったとか、なかなかあいさつができなかったのに、自分からあいさつのパターンが分かってきて、できるようになったり、仕事で無駄な話をしなくなったなど、いろいろできることが増えました。

企業も実習生が来るということで、社員教育が行き届いたという効果があったようです。社員も遅刻してはいけないとか、あいさつもきちんと目を見てしてあげないと分からないということで、社員の雰囲気も良くなったと言っていました。

税理士事務所にも行かせていただきました。ちょうど年末の時期だったので、年賀状の住所の打ち込みをさせていただいたのですが、彼はすごくパソコンの入力にたけていたので、得意だと思いながらやってくれたそうです。2時間で80件の住所録を作成して、今までは趣味でパソコンをやっていたのが、仕事として感謝されるということが初めてで、うれしかったと言っていました。企業の方からは「こんなに打ち込みが早いのなら、私より彼にやってもらった方が随分いいなあ」「すごくまじめな態度に心が癒された」と言っていました。

2年目は九つの企業に実習を受け入れていただきました。社会福祉協議会の中での高齢者のデイサービスに参加させていただいたり、税理士事務所に行かせていただいたり、店舗をたくさん持っておられるタリーズコーヒーにも行かせていただきました。コーヒーの重さなどを計らなければいけないのですが、ゆっくり計りを確かめながら入れていく方もいれば、ばさっと入れて「はい」と仕上げる方もいます。「きちんと計ってよ」と言う「これは90gですから」と言って、1回やれば、目分量で誤差も少なくできるので、この能力も生かせると気付いたところです。

ほかに、み・らいずの関連する株式会社に行ったり、駄菓子屋さんで店舗の準備をさせてもらったり、串打ちという焼き鶏の串を刺すのをさせていただいたりしました。これがこの5月からのみ・らいずの就労移行支援事業のメニューとなっています。インサイトは、リサーチアシスタント業務をやっておられます。アンケート調査などの入力作業はやはりすごく大変なのですが、この実習から今実際にそこでアルバイトさせてもらっている彼がいて、検定で全国5位に入賞しました。猫踏んじゃったを弾くように、右手と左手を交差しながらデータ入力するのですが、その方が早いとか言っています。そのほかの生活面のことなどはやはり支援していかなければいけないのですが、業務内容的には、彼は仕事を任せたらその分やってくれるので、彼に関してはどう仕事をコーディネートしていくかというところの問題になってくると思っています。

6. 活動を通して見えたこと

しかし、メモしないと、どこで修正をかけたらいいのかが分からなくなるので、「空中戦ではなく地上戦でやりなさいよ」とアドバイスをいただいて、本当にそうだと思っています。口でのやり取りで事を進めるのではなく、メモを取って、ここまであなたはできている、ここが間違っている、ここからやり直そうということで、仕事を修正できたということですよ。

難しかったのが、職場での人間関係です。こんなに複雑だったのだということに、実習に行ってみて初めて気付きました。お友達でもないし、先生でもない、上司と部下という仕事上独特の関係を、何と教えたらいいのだろうという課題がありました。

実習で「言葉遣いは丁寧に『はい』と答えるのよ」とトレーニングして行くのですが、実習先の方が緊張をほぐしてあげようとして、「昨日、ご飯何食べたん?」「何のテレビ好きなん?」とか親しい感じで話し掛けてもらうと、「おう」みたいに、一気に言葉遣いが崩れてしまうのです。「違うのよ、親しく声を掛けられても、あなたずっと『はい』でいかないといけないよ」とか、そういう練習はしていなかったというのが反省点です。お友達ではなく、お仕事の仲間だという意識をどう育てていけばいいのかが、私たちの課題だと思っています。

体験の重要性については、私たちもちろん、やってみて分かったことが



たくさんあったのと、本人もやってみて修正できる部分があったので、体験はもっともっていかないと、先のことにつながらないと思っています。全部ができるかという、この部分は得意だけでも、こちらはできないなどがあるので、ワークシェアリングの仕組みをうまくコーディネートしていけたら、もっともって働けるのではないかと思います。

7. 今後の課題

その中で就労支援事業をみ・らいずとしてもすることになり、平成23年5月1日からスタートしています。皆さまのお手元にもパンフレットをお配りさせていただいています。み・らいずとしても、この就労支援で移行を取るのがいいのか、B型を取るのがいいのか、いろいろ悩んだ結果、移行でいくことになりました。就労移行支援事業所ワンステップというのでやっています。

早期就労体験の中でも、串打ちという作業が、参加していた高機能自閉症の方はすごく早くて、きれいな串が打てるので、新しい職域ではないかと思っています。この串打ちの作業は、なかなか手間の掛かる作業で、打ち手が少ない、仕事も半端なくたくさんあるということで、スタッフが焼き鳥が好きというのも大きいのですが、取り組むことになりました。

こちらがセントラルキッチンでの作業の様子なのですが、肉などを包丁で処理をして、それで打って行って計るという仕事になります。私たちがやると、ずっと下を向かないといけないので首が痛くて肩が凝るのですが、「私は平気」と言いながら、どんどん串を打っておられる方もいます。一方で、家で包丁を触ったことがないという方もいらっしゃいますので、視覚支援も必要かということで、包丁の使い方、置き方、肩がすごく凝るのでどういう姿勢でやったらいいかなど、写真にして説明したりしています。

実際に焼き鳥の串をセントラルキッチンで打ってみました。チェーン店でいろいろなところにあるお店なのですが、店舗の開店前に仕込作業やお掃除などをさせてもらっています。接客となると夜中2時までなどになるのですが、開店前だと夕方までに終わってしまうので、働きやすい環境ではないかということと、チェーン店なので、店舗は幾つもあるので、店舗を回ればいいのではないかとということで、今、企業と話をしながら、うちの方で2年間のトレーニングを経て、できる子はお店に雇ってもらおうという話がうまく進んでいければいいとやっているところです。

あと、み・らいずのみらい館というところがあるので、そちらの方であいさつやビジネスマナーの練習なども入れて、今、就労移行支援事業もやっています。

私たちが、この四つの事業に共通して言えると思っているのが、受け入れ先が少ないことです。ひきこもっていたり不登校だったけれど外に出られるようになったといっても、出ていく先が限られていて、結局、進んでいく先がなく、どうしていけばいいのかとされているところです。教育の場面などでも、先生方はなかなか大変だということが田中先生のお話にもありましたが、ちょっとした工夫で取っ掛かりができる子どももいるので、何かちょっとした工夫ができればいいと思っています。

就労支援では、私たち福祉畑の支援者はガラスの切り方や見方、検品の仕方、串の刺し方、あるいはITでどうしたら猫踏んじやったみたいにパソコンが打てるかとか、プログラムの仕方などは分からないので、すごく支援者の限界を感じています。もっと専門的な技能を教えていただける人がいたら、彼らはもっとその特性を生かして働けるはずなのに、今、それができていない私たちのふがいなさを感じると同時に、私たちがする必要はないのではないかとこのところに行き着いて、これは新たな展開のチャンスだと思って、企業の方がどんどん即戦力になる彼らを育ててくれたらいいのと思っています。

しかし、そのためには企業に面倒を見てくださる研修費が必要になってくるので、それをどういう仕組みとして考えていけばよいかについて、作戦を練っていきたいと思っています。

私たちの活動は、私たち支援者がずっと支援をするわけではなくて、さよならしていかなければいけない支援だと感じています。近い将来、支援者がいなくても、一人でテストの問題が解けるとか、仕事に行くとか、学校に復帰するとかということが私たちの役割になるので、支援しすぎないとか、ヒントがあれば自分でできる、そのヒント探しが私たちの仕事ではないかと思っていますところで、学生たちにも寄り添いすぎたら駄目だ、さよならしなければいけない支援だからと言い続けています。

関わっていると、皆、人間として生きていると感じるので、何とかなる方法をどう見つけていくのかを、関係している機関で話し合っ、良い案を出していけたらと思っていますところ。つたない話でしたが最後までご清聴ありがとうございました。